

學界展望

二〇〇三年一月〜二〇〇三年十二月

●哲 學

本年度から、學界展望の哲學部門は、名古屋大學大學院文學研究科中國哲學研究室の竹内弘行が、神塚淑子教授・吉田純助教授および研究室の研究員大學院生諸氏の協力をえて、擔當することになった。研究室の規模や實力から言えば、まだまだ學會の仕事や擔當に十分な餘力はないが、諸般の事情からお引き受けることにした。なんとか、従來の方式を踏襲して例年並の完成を目指した。もとより、不十分・不完全とお叱りは、覺悟の上である。

本目録の作成基準は、以下の通りである。
一、目録に掲載した資料は、主に會員からの書簡やメールによる報告(いわゆる「自己申告」)を基本とし、それに加えて擔當者が、各種の方法で補充して作成したものである。ただ、補充にも限界があり、完璧ではない。お氣付きの點は、お知らせ願いたい。

二、分類は、前年と同様に、大きく單行本と論文に二分した。論文の中には、研究回顧や書評も入れた。また、それぞれを、「總記」より「その他」にいたる十二の項目に分類してあるが、どの分類にいれるかは、原則として會員の自己

申告によった。内容によっては多岐に渡るものもあり(その場合は、おおむね「總記」か「その他」に入れた)、論題からだけでは判断のつきかねるものもあった。

三、分類の同一項目内では、論者(あるいは譯者)の名前の五十音順で配列した。中國音・韓國・朝鮮語讀みを指定された場合はこの限りではない。ただ、名前の讀み方で思わぬ間違いをしているかもしれない。

四、収録した論著は、二〇〇三年の一月から十二月の間に公刊されたものであるが、それ以前のもので、既刊の本會報に收載漏れであって、本年新たに申告のあったものは、「十三、補遺」にいった。ただ、そうした申告がないものについては、今回、當方から改めて調査したり捜したりはしなかった。

本目録には、時間や能力の制約で、収集漏れや校正ミスも多いことと思われる。ご寛恕を請うとともに、お氣付きの點は、名古屋大學大學院文學研究科中國哲學研究室・竹内弘行(Tel・Fax 052-789-2279・E-mail takeuchi@lit-nagoya-u.ac.jp)までご示教をお願いする。

單 行 本

一、總 記

淺野 春二	シリーズ・道教の世界4―飛鳥天界・道士の技法	春秋社
アン・ピレ ル〔著〕丸 山和江〔譯〕	中國の神話	丸善
飯島 武次	中國考古學概論	同成社
池田知久・ 伊藤文生・ 久保田知敏・ 中島隆博・ 馬淵昌也 〔編譯〕	古い創造力 現代中國周易論文集	勉誠出版
石田 雅彦	「茶の湯」前史の研究 宋代片茶文化完成から日本の茶の湯へ	雄山閣
石塚正英・ 柴田 隆行 〔監修〕	哲學・思想翻譯語事典	論創社
稲畑耕一郎	神と人との交響樂 中國 假面の世界	農文協
梅原 郁	皇帝政治と中國	白帝社
岡村 秀典	夏王朝 王權誕生の考古學	講談社
岡本 さえ 〔編〕	アジアの比較文化名著解題	科學書院
小倉 芳彦	小倉芳彦著作選1 古代中國を讀む	論創社

學 研 東洋占術の本―運命と未來を見通す秘術の大系 學研

角田文衛・上田正昭 監修 初期王權研究委員會編 古代王權の誕生―東アジア編 角川書店

來村多加史 萬里の長城攻防三千年史 講談社

木村 正雄 中國古代帝國の形成―特にその成立の基礎條件(新訂版) 比較文化研究所

桐山昇・栗原浩英・根本敬 著 東南アジアの歴史―人・物・文化の交流史 有斐閣アルマ

工藤 元男 中國古代文明の形成と展開 早稲田大學オンリーズ

黃石林・朱乃誠 著 高木智見 譯 中國考古の重要發見 日本エディター スクール出版部

子安 宣邦 「アジア」はどう語られてきたか―近代日本のオリエンタリズム 藤原書店

坂出祥伸・梅川 純代 著 「氣」の思想から見る道教の房中術―いまに生きる古代中國の性愛長壽法 五曜書房・星雲社

阪倉篤秀 著 さまざまな角度からの中國論 晃洋書房

櫻井龍彦・李瑞雪 編 變わる中國 變わらない中國 全日出版

佐藤 一郎 中國文學の傳統と再生―清朝初期から文學革命まで 阿彌陀が来た道 百年目の大谷探検隊 毎日新聞社

志村 有弘 姓氏家系歴史傳説大事典 勉誠出版

周國強 著 算武雄・加藤昌弘 譯 中國年中行事・冠婚葬祭事典 明日香出版社

鈴木 哲雄 中國主要地名事典 隋―宋金 山喜房佛書林

田中 博美 中國禪僧列傳―禪語をうんだ名問答 淡交社

中國美學研究班(代表 河内利治) 著 《中國美學範疇辭典》譯注第一冊 大東文化大學人文科學研究所 文藝春秋

土屋 英明 道教の房中術―古代中國人の性愛秘法 東京大學出版會

東京大學東洋文化研究所 編 アジア學の將來像 東京大學出版會

富谷 至 木簡・竹簡の語る中國古代―書記の文化史 岩波書店

富谷 至 京都大學人文科學研究所報告 邊境出土木簡の研究 朋友書店

長島 猛人 知られざる中國―山西省の未開放農山村― 明德出版社

西川壽勝・久保智康 編著 鑄鏡 鏡にうつしだされた東アジアと日本 ミネルヴァ書房

深津 胤房 古代中國人の思想と生活―火による祓い― 自家出版

深津 胤房 古代中國人の思想と生活―時― 自家出版

佛敎史學會 編 佛敎の歴史的地域的展開―佛敎史學會五十周年記念論集 法藏館

福井 文雅 東方學の新視點 五曜書房・明德出版社

福田 哲之 文字の發見が歴史をゆるがす―20世紀中國出土文字資料の證言― 二玄社

武樹臣 著 植田信廣 譯 中國の傳統法文化 九州大學出版會

村瀬 裕也 東洋の平和思想 青木書店

湯淺 邦弘 異文化接觸から見た中國軍事思想史の研究 科學研究費研究成果報告書

湯淺 邦弘 よみがえる中國の兵法 大修館書店

吉野 裕子
陰陽五行と日本の文化
宇宙の法則で秘められた謎を解く
大和書房

幼學の會
孝子傳注解
汲古書院

渡邊信一郎
中國古代の王權と天下秩序―日中比較史の視點から
校倉書房

J・M・ロバート著
池上俊一監修
「圖説」世界の歴史5
東アジアと中世ヨーロッパ
創元社

二、先秦

淺野 裕一
古代中國の言語哲學
岩波書店

井口 雄哉
古代中國における周王朝時代のマトリックス年表（西周および春秋・戰國時代）
梓書院

池田 知久
郭店楚簡儒教研究
汲古書院

池田 知久
郭店楚簡の思想的
研究 第六卷
東京大學文學部
中國思想文化學
研究室
創文社

石川 英昭
中國古代禮法思想の研究
創文社

石川 忠司
孔子の哲學―「仁」とは何か
河出書房新社

磯部 隆
孔子と古代オリエント
大學教育出版

宇野 茂彦
韓非子のことば
斯文會・明德出版社

岡田 武彦
岡田武彦全集12
孫子新解
明德出版社

小倉 芳彦
小倉芳彦著作選Ⅲ
春秋左氏傳研究
論創社

串田 久治
儒教の知恵 矛盾の中に生きる
中央公論新社

楠山 春樹
老子のことば
明德出版社

五井 直弘
中國古代國家の形成と史學史
名著刊行會

小南 一郎
楚辭とその注釋者たち
朋友書店

四月 豪
東周夜話 第三話
吳起の軌跡
虹霓出版社

志賀 一朗
老子の新解釋
大修館書店

鈴木 陽吉
風説徐福傳説
新風舎

關口 順
儒學のかたち
東京大學出版會

田中 和夫
毛詩正義研究
白帝社

富谷 至
韓非子―不信と打算の現實主義
中央公論新社

中田 昭榮
詩經新編（上）―愛と祝いの詩集
郁朋社

平勢 隆郎
『春秋』と『左傳』―戰國の史書が語る「史實」「正統」「國家領域觀」
中央公論新社

吹野 安・石本 道明
孔子全書8 論語
明德出版社

松本 肇
春秋戰國の處世術―中國古典に學ぶ「逆轉の寓話」
講談社

三、兩漢

朱伯崑「著」伊東倫厚「編」福田忍・淺井史緒・室谷邦行・末岡實・原貴史
易學哲學史―第二篇 漢唐時代
北海道大學中國文化論研究室

田中麻紗巳
後漢思想の探究
研文出版

東 晉次
王莽―儒家の理想に憑かれた男
白帝社

藤田 勝久
司馬遷の旅
中央公論新社

水澤利忠・佐川 繭子
史記 列傳二
明治書院

吉川 忠夫
後漢書 第五冊 列傳三（卷二十一）
岩波書店

吉川 忠夫
後漢書 第六冊 列傳四（卷三十二）
岩波書店

吉田賢抗・瀧康秀「編」
史記（本紀）
明治書院

四、魏・晉・南北朝

今場 正美 隱逸と文學 陶淵明と沈約を中心として 朋友書店

窪添 慶文 魏晉南北朝官僚制研究 汲古書院

滋賀 秀三 中國法制史論集… 法典と刑罰 創文社

目加田誠・長尾直茂 [編] 世説新語・新書漢文大系21 明治書院

安田二郎 六朝政治史の研究 京都大學學術出版會

飯島太千雄 空海入唐 虚しく住きて實ちて歸らん 日本經濟新聞社

大庭 脩 唐告身と日本古代の位階制 皇學館出版部

大原 良通 王權の確立と授受―唐・古代チベット帝國(吐蕃)・南詔國を中心として 汲古書院

岸田 知子 空海と中國文化 大修館書店

小林 保治 [全譯注] 唐物語 講談社

小林 正美 唐代の道教と天師道 知泉書館

靜 慈圓 空海入唐の道 現代中國に甦る巡禮道を行く 朱鷺書房

高木 重俊 張説―玄宗とも 翔た文人宰相 大修館書店

田中 良昭 寶林傳譯注 内山書店

中村 裕一 隋唐王言の研究 汲古書院

古川 末喜 初唐の文學思想と韻律論 知泉書館

古瀬奈津子 遣唐使の見た中國 吉川弘文館

野間 文史 春秋正義の發展的研究 科學研究費研究成果報告書

六、宋・金・元

吾妻 重二 朱熹『家禮』の版本と思想に關する實證的研究 科學研究費研究成果報告書

伊原 弘 『清明上河圖』をよむ 勉誠出版

近藤 啓吾 四禮の研究―冠婚葬祭儀禮の沿革と意義 臨川書店

齋木 哲郎 春秋胡氏傳通解稿(上册)―隱・桓・莊・閔― 鳴門教育大學倫理學研究室

蘇鉉盛 [著] 伊東倫厚 [譯] 張南軒の太極說 北海道大學中國文化論研究室

東 英壽 歐陽脩古文研究 汲古書院

林 鳴宇 宋代天臺教學の研究―『金光明經』の研究史を中心として 山喜房佛書林

末木文美士 [編] 現代語譯 碧巖錄 岩波書店

三浦 秀一 中國心學の稜線―元朝の知識人と儒道佛三教 研文出版

七、明・清

岡田 武彦 岡田武彦全集² 王陽明大傳二 生 明德出版社

岡田 武彦 岡田武彦全集³ 王陽明大傳三 生 明德出版社

菊池 秀明 太平天國にみる異文化受容 山川出版社

佐藤 武敏 王國維の生涯と學問 風間書房

四天王寺國際佛敎大學日中交流研究會 『日本國志』研究―禮俗志―「神道」― 四天王寺國際佛敎大學日中交流研究會

曹永祿 [著] 渡昌弘 [譯] 明代政治史研究―科道官の言官的機能 汲古書院

方 蘭 エロスと貞節の靴 彈詞小説の世界 勉誠出版

八、近現代

稻田 義行 現代に息づく陰陽五行 日本實業出版社

川勝 平太 アジア太平洋經濟圈史 藤原書店

近藤 邦康 毛澤東 實踐と思想 岩波書店

吳 智英 現代人の論語 文藝春秋

嵯峨 隆 戴季陶の對日觀と中國革命 東方書店

佐藤 三郎 中國人の見た明治日本―東遊日記の研究 東方書店

志賀 市子 中國のこっくりさん―扶鸞信仰と華人社會 大修館書店

鄭超麟〔著〕 初期中國共產黨群像―トロツキスト 鄭超麟回憶錄 平凡社東洋文庫

九、琉球・朝鮮

松浦 章 清代中國琉球貿易史の研究 榕樹書林

山内 弘一 朝鮮からみた華夷思想 山川出版社

十、日本

學界展望(哲學)(二〇〇三年一月〜十二月)

荒木 修 心の弓 弓道無限への道 私家版

荒野 泰典 江戸幕府と東アジア 吉川弘文館

大庭 脩 日中交流史話―江戸時代の日中關係を讀む 燃焼社

岡崎敬・春 魏志倭人傳の考古學 九州篇 第一書房

岡崎敬・春 魏志倭人傳の考古學 對馬・壹岐篇 第一書房

黒住 眞 近世日本社會と儒教 ぺりかん社

佐原 眞 魏志倭人傳の考古學 岩波書店

福永 光司 日本の道教遺跡を歩く―陰陽道・修驗道のルーツもここにあった 朝日新聞社

頼 惟勤 日本漢學論集―嶺南松廬叢錄 汲古書院

山崎 益吉 横井小南道徳哲學―總合大觀の行方― 高文堂出版社

十一、書誌學

池田 溫 敦煌文書の世界―校勘學講義―中國 名著刊行會

倪其心〔著〕 橋本秀美・鈴木かおり〔譯〕 古典文獻の讀み方―中國古典文獻學・基礎篇― ずさわ書店

十二、その他

華 梅〔著〕 施潔民〔譯〕 中國服裝史―五千年的歴史を檢證する 白帝社

三宅 正彦 第三期國際身分制研究會報告書 部落解放・人權

十三、補遺

辛 賢 漢易術數論研究―馬王堆から『太玄』まで― 汲古書院

楊儒賓・張寶三〔共編〕 日本漢學研究初探 勉誠出版

劉達臨^{〔著〕}
鈴木博^{〔譯〕}

中國性愛文化 青土社

論文

一、總記

石井 公成
アジア禪宗史とい
う視點 東方學の新視點

王 建新
新疆ウイグルのシャ
ーマニズム―イスラ
ムの現代に生きる
民俗信仰― アジア遊學 58

丘山 新
インド的冥想から
中國禪の思想へ 東洋文化 83

岸田 知子
儒教に學ぶことは
まだまだある アジア遊學 52

木島 史雄
古典における字體
のやくわり―『尚
書』隸古定字の
かたるもの― 中國 2 1 15

金 文京
中國地圖の不思議
古代中國の地震と
その「豫言」 東方宗教 102

齋藤 智寛
『中國禪學』第一
卷管窺―より實り
ある學術交流のた
めに― 駒澤大學禪研究
所年報 15

阪谷 昭弘
夏王朝の傳承にお
ける有扈討伐者に
ついての一試論 學林 36・37

佐々木伸一
漢族のシャーマン
淨化される祖先―
南部中國漢民族の
洗骨改葬儀禮― アジア遊學 58

蔡 文高
新出土資料關係文
獻提要(一) 中國研究集刊 33

佐野大介・
前川正名・
上野洋子
〔共著〕
「死者の罪業をお
許してください」―
回族の「民俗宗教」
覺書― アジア遊學 58

澤井 充生
神々との家族契約
『論衡』の縁より
して日本の縁に及
ぶ 中國思想史研究
26

謝 荔
周桂鈿^{〔著〕}
池田 秀三
〔譯〕
二里頭時代の土器
動態とその背景―
中國初期國家形成
過程における地域
間關係の分析
蚩尤に於ける天地
分離 アジア遊學 58

秦 小麗
中國禮制と日本の
儀式(一) 儀禮文化 32

高戸 聰
中國禮制と日本の
儀式(二) 儀禮文化 33

瀧川政次郎
〔著〕小林
宏^{〔解題〕}
瀧川政次郎
宏^{〔著〕}小林
宏^{〔解題〕}
中國禮制と日本の
儀式(三) 儀禮文化 33

武田 時昌
物類相感をめぐる
中國の類推思考 中國 2 1 15

中國美學研
究班(代表
河内利治)
《中國美學範疇辭
典》譯注稿 人文科學 8

唐 士其
儒教學說と正義理
論 日本大學政教研
究 39 4

戸川 芳郎
わたくしの中國學
中國―社會と文
化 18

中島 敏夫
歴史と神話への視
座―疑古派禹天神
論の檢證からの再
出發―(七) 中國 2 1 15

中島 敏夫
歴史と神話への視
座―疑古派禹天神
論の檢證からの再
出發―(五) 中國 2 1 17

西口 智也
詩經研究文獻目錄
〔邦文篇〕(平成
11年)―(平成
11年) 詩經研究 28

林田愼之介
中國の隱者とその
生き方 月刊しにか 2003 1

日高 昭二
中上健次とアジア―
陰陽五行と風水思
想をめぐって― アジア遊學 57

秀村 研二
儒教という傳統
古代中國人の思想
と生活―「文化」
と「文明」につい
て 東洋學研究所集
刊 33

深津 胤房
長安の道教的空間
を案内する アジア遊學 50

増尾伸一郎
神々の變化―臺灣
漢人の宗教實踐の
一側面― アジア遊學 58

三尾 裕子

水口 拓壽	『葬書』—風水理論の古典	アジア遊學 47			
溝口 雄三	中國の日本讀み	大東文化大學漢學會誌 42	淺井 茂紀	孟子の良心折學論—良知良能と關連して—	千葉南入紀要 3
宮澤 正順	中國食文化の基層—道教と食—	中國食文化の歴史	淺野 裕一	『五行篇』の成立事情—郭店寫本と馬王堆寫本の比較—	中國出土資料研究 7
山田 利明	佛像東漸—東方學をめぐる歴史的研究について	東方學の新視點	石井眞美子	『孫子』—虚實篇考—その編纂過程—	學林 36・37
湯淺 邦弘	インターネットで學ぶ懷德堂	懷德 71	井ノ口哲也	平勢隆郎著『春秋』—左傳—の史書が語る—史實—「正統」、國家領域觀—	月刊しにか 2003—6
吉澤誠一郎	歴史敘述としての自傳	中國—社會と文化 18	井上 了	孟子における世襲王朝擁護論—その反禪讓・反放伐論を通じて—	種智院大學研究紀要 4
吉村 誠	中國唯識諸學派の展開	東方學の新視點	岩本 憲司	春秋經傳集解譯稿續篇(五)—襄公二十六年—二十一年	中國研究集刊 32
李 建民	考古學上の發見と任脈學說の新認識	中國—社會と文化 18	岩本 憲司	春秋經傳集解譯稿續篇(六)—襄公二十二年—二十四年	中國研究集刊 34
麻國慶〔著〕石垣直〔譯〕	龍の後繼—祖先と子孫—	アジア遊學 58	内山 知也	『曾子曰、士不可以不弘毅—章(論語・泰伯第八)』	斯文 111
渡邊 欣雄	風水の科學技術史	アジア遊學 47	江村 治樹	戰國時代尖足布・方足布の性格	名古屋大學文學部研究論集・史學 49
渡邊 義浩	所有と文化—中國貴族制研究への一視角—	中國—社會と文化 18	王 景東	琅邪臺と徐福の東渡	アジア遊學 52
秋山陽一郎	『老子』傳突本來源考—テキスト處理による「項羽妾本」—の檢證	漢字文獻情報處理研究 4	王 葆炫	郭店竹書時代考證	中國出土資料研究 7

學界展望(哲學)(二〇〇三年一月〜十二月)

瀧澤 尚	列子樂園考	學林 36・37	古「樂」の變容― 『呂氏春秋』古樂 篇の「樂」小史を 讀む	高知大學教育學 部研究報告 63	方 印華	徐福文化の研究に ついて	アジア遊學 52
徐 鴻進	徐福の歴史的定位 と研究について	アジア遊學 52	銀雀山漢墓竹簡 「晏子」の資料的 價值をめぐって― 出土文獻から傳世 文獻を見る―	東洋の思想と宗 教 20	牧角 悦子	『論語』の中の鬼 神―呪術から儒術 へ―	二松學舎大學論 集 46
末永 高康	仁内義外考―郭店 楚簡と孟子の仁義 說―	鹿兒島大學教育 學部研究紀要 (人文・社會科 學編) 54	鹽山は東渡した千 童の郷里	アジア遊學 52	前川 正名	新出土資料關係文 獻提要(二)	中國研究集刊 34
菅本 大二	「五十而知天命」 小考	中國文化―研究 と教育― 61	張 吉忠	徐福の冠獄封禪が 意味するもの	前田 繁樹	老子の行方	東方學の新視點
關口 順	中國學分野におけ る出土文獻と古典 學の再構築―楚簡 縮衣篇から「徳」 を考える	科學研究費「古 典學の再構築」 研究成果報告集	張 良群	徐福斷想	水野 卓	春秋時代における 統治權の變容― 「盟」の意味を中 心として	東方學 106
戰國楚簡研 究會	戰國楚簡研究の現 在	中國研究集刊 33	程 天良	徐福の源流を 探る	翠川 信人	中國古代における カマキリに對する イメージについて	東方研究 2(亞 細亞文化交流協 會)
湯淺邦弘	論語總略について	大妻女子大學紀 要(文系) 35	鄭 一民	周易覺書(一)・占 筮易斷の基礎知識 について	三善喜一郎	徐福を顯彰し、そ の基地を作る	アジア遊學 52
福田哲之	郭店楚簡『性自命 出』と上海博物館 藏『性情論』との 關係	日本中國學會報 55	陶 和平	孟子の中の「楚」 五十歩百歩につい て	村松 弘一	秦「統一」の虛像 と實像	アジア遊學 56
竹田 健二	郭店楚簡『性自命 出』と上海博物館 藏『性情論』との 關係	日本中國學會報 55	永淵 道彦	周家臺三〇號秦墓 竹簡の治療法	室谷 邦行	『莊子』齊物論篇 の「有始也者」章 について	中國哲學 31
館野 正美	『道』と神話―莊 子の『道』におけ る神話的表象―	日本大學文理學 部研究紀要 66	野田 雄史	『六韜』の構造と その原型について	山田 史生	『莊子』齊物論篇 の相對主義	集刊東洋學 89
田中 智幸	郭店楚簡『唐虞之 道』と『呂氏春秋』 堯舜禪讓傳説を めぐって―	鶴林紫苑	萩庭 勇	上海博物館藏戰國 楚竹書『子羔』の 再検討	山本 弘峰	徐福は始皇帝が命 じた倭の王であつ た	アジア遊學 52
谷口 滿	屈原傳説の形成	日本秦漢史學會 會報 4	服部 泰澄	楚竹書『子羔』の 再検討	吉田 篤志	『左傳』の「大義 親を滅す」につい て	大東文化大學漢 學會誌 42
			淵脇 次男	方士・徐福と宮崎 の芳士	吉永慎二郎	『孟子』所說春秋 と『左傳』―その 經傳の先後をめぐ って―	中國研究集刊 34

李 承律 郭店楚簡『唐虞之道』の養生思想と禪讓説との関連について―
中国哲學研究 18

工藤 卓司 賈誼と『賈誼新書』董仲舒における天論の再吟味―
中国哲學叢刊 28・29

佐野 誠子 志怪書誕生の素地としての『風俗通義』―『風俗通義』における災異と怪異―
中国―社會と文化 18

三、兩 漢

石合 香 秦漢期の受命改制―五徳終始説と三正説による検討
東方學の新視點

近藤 則之 春秋繁露通解並びに義證通讀稿十七卷十五(全)
佐賀大學文化教育學部研究論文 集 7-12

瀨川 敬也 秦漢時代の身體刑と勞役刑―文帝刑制改革を以て―
中国出土資料研究 7

井ノ口哲也 中國古代の「遇不遇」論―「時」と「命」をどう捉えるか―
池田知久編『郭店楚簡儒教研究』(汲古書院)

坂本具償・財木美樹「共著」『春秋繁露』譯注稿 正貫・餘序・離合根・立元神・保位權篇
高松工業高等專門學校研究紀要 38

鄧 紅 王充「命」論新議―尙書體制形成前史―
大分縣立藝術文化短期大學研究紀要 40

内山 直樹 褚少孫の『史記』補續
中國文化 61

坂本頼之・岩野 忠昭「共著」『春秋繁露』註譯稿(二十五)
東方大學中國哲學文學科紀要 11

富田 健之 前漢前半期の皇帝支配をめぐって―
日本秦漢史學會會報 4

大形 徹 「仙」と「僊」―神仙思想の形成と文字の變化―
人間文化學研究 集録 12

坂内 千里 『說文解字繫傳』引『書』考
東方學 105

永井 彌人 前漢武帝期の泰山明堂建設に關する一考察
東洋の思想と宗教 20

學習院大學 漢簡研究會 漢初官吏犯罪―編江陵張家山漢簡『秦書』を讀む―
中國出土資料研究 7

佐藤 達郎 漢代の古官箴譯注篇(中)
大阪樟蔭女子大學學藝學部論集 40

永井 彌人・石合 香・井ノ口哲也 『白虎通』譯注・卷一(節篇)(一)
中國古典研究 48

影山 輝國 漢代避諱に關する若干の問題について
東洋文化研究所紀要 144

佐藤 達郎 故實「漢官解詁」の編纂―その經緯と構造―
史林 86-4

仲山 茂 兩漢功曹考
名古屋大學東洋史研究報告 27

嘉瀬 達男 『法言』の表現―經書の援用と模倣―
學林 36・37

佐藤 直人・仲山 茂「共著」『譯註』銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』譯註(一)
名古屋大學東洋史研究報告 27

新田 幸治 讀「汲鄭列傳」―何休の霸道觀―陳蕃等の經世意識を手掛かりに―
山口大學教育學部研究叢書 53

東 晉次 漢代爵制論をめぐ
る諸問題 日本
思想史學會
4

福島 正 『論衡』と『史通』
26 中國思想史研究

開嶋 潤一 鄭玄『詩譜』の
「國風變風」の
「七月」箋研究序
說 中國文化 61

開嶋 潤一 鄭玄「國の三體」
の解釋(上)「
周禮」「春官・箒
章」注と「詩」
「幽風・七月」箋
香川大學國文研
究 28

水開 大輔 秦律、漢律にお
ける殺人罪の類型
張家山漢簡「二年
律令」を中心
史觀 148

南澤 良彦 蔡邕の學問と思想
律曆と明堂につ
いて 中國哲學叢
刊 28・29

村田 進 董仲舒の養生説
治身と治國およ
び正心について 學
林 36・37

日黒 杏子 前漢武帝期にお
ける郊祀禮制の成
立甘泉泰畤の分析
を中心 史林 86
―6

禮記注疏研
究班 禮記注疏檀弓篇
譯注(十六) 中國
學志・蟲號

早稲田大學
簡帛研究會 銀雀山漢簡「守
法守令等十三篇」
の研究(一)要言篇・
庫法篇 中國出土
資料研究 7

渡部東一郎 仲長統の天人觀に
ついて 集刊東洋學
89

四、魏・晉・南北朝

猪股 宣泰 『論語義疏』に見
える郭象說と皇侃
政治權力と隱者―
陸機と阮籍・嵇康
六朝道教について―
藥王山北朝碑石紹
介 京都女子大學宗
教・文化研究紀
要 16

大上 正美 劉義慶傳(『宋書』
卷五十一)列傳第十
一(宗室)譯注 大東
文化大學漢
學會誌 42

大野 修作 深奥の宴―梁代
「長安有狹邪行」
に關する一考察 東
方學 106

大村 和人 自然環境文學の隱
者―陶淵明 月刊し
にか 2003
―3

加藤 國安 曹操政權の名士
陶淵明(『桃花源記』
「外人」小考)内
山論文「以前」の
解釋とその問題點
について 36 新し
い漢文教育

加藤 徹 陶淵明(『桃花源記』
「外人」小考)の
解釋史 大東文化
大學漢
學會誌 42

門脇 廣文 命定論に見出す希
望―六朝期の命定
論考察を通じて― 中
國 2・15

門脇 廣文 「外人」の解釋史
の概要― 大東文化
大學漢
學會誌 42

近藤 泉 魏晉以降の隱逸の
思想およびその實
態の變遷について 論
集言語文化篇
1412

太田 稔 拓跋珪の「部族解
散」政策について 集
刊東洋學 89

佐竹 保子 陸機の天人對―先
秦から西晉に至る
對偶の―様相― 集
刊東洋學 89

佐竹 保子 陸機「連珠」五
十種について 日本
中國學會報
55

鈴木 雅隆 鎮墓文の系譜と天
師道との關係 史
滴 25

前田 繁樹 前四史撰者列傳の
研究「晉書」陳壽
傳譯注 史滴 25

竹園 卓夫 晉朝における封爵
繼紹に關する一考
察 東北大學東洋史
論集 9

塚本 宏 王羲之と王敦及び
庾亮との關係につ
いて―「世說新語」
を讀む中で 和洋
女子大學紀
要・文系編 43

西川 靖二 王弼の「易」解釋
における「卦主」
について(上) 龍
谷紀要 24―2

春本 秀雄 北魏の廢佛と太武
帝(一) 佐藤良純教
授古
稀記念論文集

東川 祥文 劉劭『都官考課』
とその批判をめぐ
つて 中國思想史
研究 26

東川 祥文 劉劭の法思想につ
いて―「人物志」
の政治的分業論を
手掛かりに 東方
學 105

堀口 育子 郭象の「自得」と
『莊子』正文 學
林 36・37

前田 繁樹 杜子恭とその後裔
東方宗教 102

前田 繁樹	房祠破壊と道士の原像	東洋の思想と宗 20	高木 重俊	遅れてきた隠者―王積	3 月刊しにか 2003
水野 厚志	莊子郭象注譯稿 外篇第八 駢拇 (前半)	大東文化大學漢學會誌 42	高橋 佳典	懿宗朝における崇佛政策とその背景 咸通十四年の舍利供養會を中心にして	東洋の思想と宗 20
柳川 順子	魏朝における「相和」「清商三調」の進いについて	九州中國學會報 41	高橋 朱子	『五經正義』の性情説―その陰陽思想との關係―	青山語文 33
吉村 誠	中國唯識諸學派の展開	東方學の新視點	立石 謙次	南詔國後半期の王權思想の研究―『南詔圖傳』の再解釋―	東洋學報 85―2
渡邊 義浩	三國時代における「公」と「私」	日本中國學會報 55	田中 良昭	中國禪研究の現代的課題(一)―神會的評價をめぐって(二)―禪宗祖統説をめぐって(三)―禪の解釋をめぐって	宗學と現代 5
渡邊 義浩	死して後已む―諸葛亮の漢代的精神	大東文化大學漢學會誌 42	田中 良昭	玉眞公主をめぐる道士と玄宗期の道教	東方學の新視點
渡邊 義浩	「史」の自立―魏晉期における別傳の盛行を中心として	史學雜誌 112―4	田中 良昭	禪宗燈史と敦煌遺書	駒澤大學佛教學部論集 34
渡邊 義浩	所有と文化―中國貴族制研究への一視角	中國―社會と文化 18	土屋 昌明	略論中國古代艷遇型「遊仙」故事的承傳與變異―以美「遊仙窟」一男雙美「故事」框架爲中心―	九州中國學會報 41
青木 隆	敦煌出土地論宗文獻『融即相無相論』について―資料の紹介と翻刻―	東洋の思想と宗 20	董 上徳		
赤羽目匡由	封敎作「與渤海王大舜震書」について―その起草・發行年時と渤海後期の權力構成―	東洋學報 85―3	戸田 靖久	玄宗御製韓昌黎考―中國王權と怪異―	東洋學報 85―3

五、隋・唐

學界展望(哲學)(二〇〇三年一月〜十二月)

中尾健一郎 六朝初唐の詠松詩について―王勃と劉希夷における「涸底の松」の源流をめぐって― 九州中國學會報 41

西口 智也 田中和我著『毛詩正義研究』 中國古典研究 48

福井 信昭 唐代の進奏院―唐後半期『藩鎮體制』の側面― 東方學 105

三田村圭子 杜光庭の道教經典注釋書とその後の展開 東方學の新視點

山下 將司 玄武門の變と李世民配下の山東集團―房玄齡と齊濟地方― 東洋學報 85―2

吉村 誠 玄奘西遊意―玄奘は何故インドへ行ったのか― 佛敎史學研究 46―1

吉村 誠 攝論學派の心識說について 駒澤大學佛敎學部論集 34

劉禹錫散文研究會 劉禹錫散文譯注 中國文學會報 10

渡部 英喜 柳宗元「江雪」詩小考―その解釋をめぐって― 新しい漢字漢文教育 37

六、宋・金・元

青木 敦 南宋女子分法再考 中國―社會と文化 18

吾妻 重二 市來津由彦著『朱熹門人集團形成の研究』 集刊東洋學 89

飯山 知保 金元代華北における州縣祠廟祭祀からみた地方官の系譜―山西平遙縣應潤侯廟を中心に― 東洋學報 85―1

市來津由彦 陳淳論序説―「朱子學」形成の視點から― 15 東洋古典學研究

井ノ口哲也 王欽若他『冊府元龜』 岡本さえ篇著『アジアの比較文化名著解題』(科學書院)

王 清毅 宋明の民間詩にみる徐福 アジア遊學 52

小川 快之 『清明集』と宋代史研究 中國―社會と文化 18

尾崎 康 宋代における刊刻の展開 帝京史學 19

小笠 智章 張載思想再考 中國 2 1 15

小島 毅 周敦頤神話の崩壊―土田健次郎著『道學の形成』を讀んで― 創文 453

恩田 裕正 『朱子語類』卷九十三譯注(二) 汲古 43

恩田 裕正 『朱子語類』卷九十三譯注(三) 汲古 44

垣内 景子 朱熹「格物窮理」再論―心から世界へ― 東方學の新視點

垣内 景子 『朱子語類』譯注(五)卷一―四―集 10(28條訓門人) 明治大學敎養論 376

河内 利治 倪元璐年譜 大東書學 3

河内 利治 黃道周注斷『廣名將傳』考 中國文化 61

木下 鐵矢 朱子學の位置(10) 15 東洋古典學研究

木下 鐵矢 朱子學の位置(11) 16 東洋古典學研究

木下 鐵矢 土田健次郎氏『道學の形成』第四章「程頤の思想と道學の登場」を讀む―「理」―理解をめぐって― 16 東洋古典學研究

小林 隆道 宋代之の廣域區畫(路)について 史滴 25

齋木 哲朗 歐陽修の春秋學―「人情」の「春秋」解― 鳴門敎育大學研究紀要(人文社會科學編) 18

齋木 哲朗 程伊川の春秋學 中國哲學 31

佐野 大介 司馬光における「古文孝經指解」の位置 新しい漢字漢文教育 37

末木 恭彦 『四書集注』における「程子曰」の考察 文化 21

鈴木 健郎 白玉蟾の内丹說 東方宗教 102

ソールハン・ゲレルト モンゴル帝國時代におけるハーンたちの世界觀について 東西南北 2003

『朱子文集』譯注 論集・アジアの文化と思想 12

チヨクト	チンギス・カンの大ジャサの内容に關する考察	史滴 25	堀内 洋材	文天祥評價に關する一考	追手門學院大學アジア文化學科年報 6	相原 健石	「短長」考	17	二松學舎大學大學院紀要・二松
佃 隆志	王安石「上仁宗皇帝言事書」(萬言書)の理念	學林 38	前川 亨	中國における『血盆經』・『日本』の「血盆經」信仰に關する比較研究のため	東洋文化研究所紀要 142	安部 力	星湖學派の天主教觀について 中國末期との比較を通して	29	中國哲學叢刊 28・
土田健次郎	古典としての古典學 道學に於ける口語文獻と經書解釋の方法	論集・本文批評と解釋(古典學の再構築)研究成果報告書	前川 亨	禪宗史の終焉と寶卷の生成 「銷釋山寶卷」を中心に	東洋文化 83	荒木 見悟	頓悟漸修と『西遊記』 『西遊記證道大奇書』の觀點	16	妙心寺派教學研究紀要 1
土田健次郎	道學という學派 「道學の形成」上梓に際して	創文 450	溝本 章治	朱子「所以然・所當然」考	哲學 55	荒木龍太郎	王龍溪とその妻 明末儒者の思想と生活(その一)	69	活水論集 46
坪井 直子	「二十四孝」朱壽昌の刺血寫經 事實と虚構・續	佛敎大學大學院紀要 31	森 由利亞	全眞坐鉢 元明期の全眞教儀禮を中心に	東方學の新視點	荳澤 耕一・橋本 昭典	周豫同注皮錫瑞『經學歷史』全譯(十七)	69	千里山文學論集
西上 勝	家庭の情景 李清照「金石錄後序」をめぐって	山形大學紀要(人文科學) 151	山口 智哉	宋代郷飲酒禮考 儀禮空間としてみた人的結合の(場)	史學研究 241	石田 志穂	明清内丹思想史における「光」の展開 伍柳派を軸として	101	東方宗教
西村 幹也	モンゴル北部ダルのハド盆地のシャマニズム ツァータン・トバの事例	東西南北 2003	横山 健一	呂陶試論 元祐學術との關連から	九州中國學會報 41	岩井 茂樹	大清帝國と傳國の鑿	56	アジア遊學
西脇 常記	佛敎徒の遺言	日本中國學會報 55	横山 健一	北宋經筵考	中國哲學叢刊 28・	上田 弘毅	王陽明の心即理について 島田虔次氏の心即理理解の再検討	90	集刊東洋學
早坂 俊廣	黃震の「浙學」 現實と表象のはざまで	信州大學人文學部人文科學論集 37	吉田 公平	朱子の『中庸章句』について	中國古典研究 48	大木 康	宣爐因緣 方拱乾と冒襄	55	日本中國學會報
林 文孝	歐陽脩の正統論と歴史敘述	中國 社會と文化 18	早稻田大學宋代史ゼミナール	『俄藏黑水城文獻』宋西北邊境軍政文書裁判案件譯注稿	史滴 25	小川 恆男	黃遵憲詩の物語性について	37	新しい漢字漢文教育
平元 道雄	北宋における顔子評價を巡って	中國哲學叢刊 28・	七、明・清			小川 恆男	黃遵憲詩の「饒舌」について	55	日本中國學會報
藤原 崇人	遼代興宗朝における慶州僧録司設置の背景	佛敎史學研究 46							

學界展望(哲學)(二〇〇三年一月~十二月)

小川 晴久

洪大容と清朝―洪大容の學者像と學問觀―
二松學舎大學論集46

佐藤 仁史

清末民國期の地方志と地域の敘述
アジア遊學56

高柳 信夫

『政治講義』に見る嚴復の思想的特質
中國―社會と文化18

小野寺史郎

中國最初の國旗―清朝・黃龍旗について―
中國研究月報668

佐藤 豊

章炳麟「釋載」における「長民」の意味
「行巴」分離の意識
愛知教育大學研究報告52(人文・社會科學)

瀧野 邦雄

清代八股文における破題・承題について
經濟理論312

加藤 春代

成化本『白兔記』譯註稿(一)

佐野公治・張龍龍・庄兵・梁音・小崎智則・田中宏樹・翁玉強「共著」

口語譯・王晉漢に與えた王陽明の書翰(その二)
名古屋大學中國哲學論集2

瀧野 邦雄

清代八股文における起講について
經濟理論313

高橋文治

毛奇齡の陽明學評價と朱子學批判について―張烈との論争を中心に―
中國哲學31

澤田 雅弘

焦循『里堂道聽錄』所錄の南北書派論・北碑南帖論について
書學書道史研究13

竹内 弘行

康有爲『日本書目志』の一考察
名古屋大學文學部研究論集・哲學49

谷口高志

馮夢龍「明末江南社會の「艷情」に關して」
九州中國學會報41

下見 隆雄

董鼎元『女學』の研究(四)
東洋古典學研究15

竹内 弘行

康有爲『大同書草稿』譯注(三)
名古屋大學中國哲學論集2

西尾 俊

章學誠における經書の位置
待兼山論叢37(哲學篇)

下見 隆雄

董鼎元『女學』の研究(五)
東洋古典學研究16

覃 啓勛

增田嶽陽と來日した中國知識人との交流について―嶽陽と中國人の筆談録―
東洋文化研究所紀要142

金原 泰介

『板橋雜記』成立小考
日本中國學會報55

下見 隆雄

董鼎元『女學』の研究(四)
東洋古典學研究15

陳 捷

增田嶽陽と來日した中國知識人との交流について―嶽陽と中國人の筆談録―
東洋文化研究所紀要143

河野 眞人

『隋煬帝艷史』と馮夢龍「明末江南社會の「艷情」に關して」
九州中國學會報41

下見 隆雄

董鼎元『女學』の研究(五)
東洋古典學研究16

陳 捷

增田嶽陽と來日した中國知識人との交流について―嶽陽と中國人の筆談録―
東洋文化研究所紀要142

黒田 秀教

章學誠における經書の位置
待兼山論叢37(哲學篇)

錢明「著」
森宏之「譯」

王陽明「歷朝武機捷録」について
永富青地氏の論稿に寄せて―
中國哲學叢刊28・中國思想史研究26

陳 捷

增田嶽陽と來日した中國知識人との交流について―嶽陽と中國人の筆談録―
東洋文化研究所紀要143

小塚 由博

蔡元培と宗教(その四)―第三章「群學說」―
『天演論』との出會い(二)

孫 路易

王陽明の「良知」の再檢討
中國思想史研究26

陳 捷

增田嶽陽と來日した中國知識人との交流について―嶽陽と中國人の筆談録―
東洋文化研究所紀要143

後藤 延子

章炳麟「暄書」と明治思潮―西洋近代思想との關連で―
日本中國學會報55

高井 たかね

明代前期の茶書に就きて(中)―陸樹聲の『茶寮記』
東京大學藝文學院・人文科學54

鶴成 久章

清代檔案史料論序
清代乾隆期の日本漂流民送還關係を素材として―
東京大學史料編纂所研究紀要13

小林 武

章炳麟「暄書」と明治思潮―西洋近代思想との關連で―
日本中國學會報55

高橋 忠彦

明代前期の茶書に就きて(中)―陸樹聲の『茶寮記』
東京大學藝文學院・人文科學54

黨 武彦

清代檔案史料論序
清代乾隆期の日本漂流民送還關係を素材として―
東京大學史料編纂所研究紀要13

中 純夫	劉宗周の「學言」について―慎獨説から誠意説へ―	25	中國思想史研究	永野 實・水野 青地	現代語譯『陽明先生遺言録』(2)	86	防衛大學校紀要	梁 音	清代の孝子說話資料『素行録』解題―「王武子妻」孝行說話における「食人肉」行為をめぐる―	名古屋大學中國哲學論集2
永富青地・水野 實	『陽明兵策』の基礎的研究(3)	43	人文社會科學研究	宮内 保・玉城 要	『日知錄集釋』注釋(第四回)上	16	文教大學文學部紀要	八、近現代		
鍋島亞朱華	李見羅の「修身」と「知止」の思想	55	日本中國學會報	矢野 隆男	黃遵憲の民俗觀と神道説と					
野間 文史	日知錄譯注春秋篇(四)	15	東洋古典學研究	山口 るみ子	梁啓超「中國道德之大原」にみる「道德」	39	東洋大學大學院紀要			
野間 文史	日知錄譯注春秋篇(五)	16	東洋古典學研究	山下 一夫	『封神演義』の戲曲化と民間信仰への影響	101	東方宗教	淺野 春二	一九三〇年代以降の道士と道教儀禮をめぐるいくつかの變化―臺灣南部臺南地區の調査から―	東方學の新視點
野間 文史	劉文淇『春秋左氏傳舊注疏證』を讀む	63	廣島大學大學院文學研究科論集	山本 英史	「一君萬民」のまぼろし	56	アジア遊學	石井 剛	劉師培の倫理秩序觀	中國哲學研究19
野村 鮎子	歸有光「先妣事略」の系譜	55	日本中國學會報	横久保 義洋	『於陵子』の聖人像	42	岐阜聖徳學園大學紀要	石川 英昭	楊度論―社會的文脈における意思決定―	鹿兒島大學法學論集37―1・2
橋本 敬造	徐光啓にみる改曆事業と儒教の論理	34	關西大學社會學部紀要	吉田 公平	王陽明『親民堂記』考	11	東洋大學中國哲學文學科紀要	岩間 一弘	兩大戰間期の上海における商業教育の展開と新中間層學院を中心に―	中國―社會と文化18
馬場 將三	梁啓超の『新史學』について―その「新」の考察を通して―	91	東洋文化復刊	吉田 公平	王陽明の「大學問」について―朱子の『大學章句』との比較―	40	東洋大學東洋學研究	岩間 一雄	『中國社會各階級の分析』への考察―毛澤東(一九二一―一九二五)―	岡山大學法學會雜誌52
范 金民	明清江南城市文化研究學要(1976―2000年)	13	大阪市立大學東洋史論叢	吉田 公平	王陽明の「稽山書院尊經閣記」について	15	東洋古典學研究	王 貞月	臺灣シヤーマンの民族醫療メカニズム―歴史傳承による治療手法を中心に―	九州中國學會報41
三浦 秀一	明代莊學史研究のために	90	集刊東洋學	吉田 公平	王陽明の「博約説」について	38	アジア文化研究所研究年報			
水上 雅晴	疏校勘記『十三經注疏』	31	中國哲學	吉田 純	閩家の四十年	49	名古屋大學文學部研究論集・哲學			
水上 雅晴・金原 泰介	顧炎武『日知錄』科舉論評議(三)―科目―	31	中國哲學							

學界展望(哲學)(二〇〇三年一月〜十二月)

大塚 博久	張之洞の『勸學篇』と教育改革	アジアの歴史と文化 ⁷	竹元 規人	歴史はいかに作られるか―初期顧頡剛における古史と民俗	中國哲學研究19	安 炳周	栗谷の改革主義と民本主義	中國―社會と文化18
緒形 康	記憶は抵抗する―駐米大使・胡適の抗日戦争	現代中國研究12	中島 隆博	「中國哲學史」の系譜学―ジョン・デューリーの發生的方法と胡適	中國哲學研究19	海老田輝己	李退溪の應用倫理思想	哲學55
緒形 康	嚴復と籌安會問題	中國―社會と文化18	長堀 祐造	鄭超麟とその時代―歴史の中の中國トロッキー派	平凡社東洋文庫『初期中國共產黨群像―トロッキースト鄭超麟回憶録』解説論文	桑野 榮治	朝鮮時代の國家祭祀と儒教	アジア遊學50
白井 順	二十世紀新儒家再考	中國學志・蟲號	長堀 祐造	レーニン「黨の組織と黨の文學（出版物）」―翻譯問題と毛澤東―文藝講話―について	東方學106	小國 喜弘	戦後沖繩と國民教育	アジア遊學53
河田 梯一	文化の動向―哲學思想	中國年鑑 ²⁰⁰⁸	徐 性泰	東方學106	須川 英徳	背徳の王燕山君	朝鮮肅宗三十四年描畫入り『坤輿萬國全圖』攷	アジア遊學50
小暮 貴代	馮友蘭『人生哲學』について	二松學舎大學人文論叢71	鈴木 信昭	永島 廣紀	近代の朝鮮儒教におけるその（復土）と（革新）	『朝鮮儒林文化の形成と展開に関する総合的研究』（科學研究費研究成果報告書）	『朝鮮儒林文化の形成と展開に関する総合的研究』（科學研究費研究成果報告書）	アジア遊學50
小林 修典	『父母恩重經』にみる親子關係―現代の育児に示唆するもの	ノートルダム清心女子大學紀要・文化學編27―1	中村 聰	アジヤ近代化の諸相―日中近代における易服の觀念―	玉川學園女子短期大學紀要・論叢27	中 純夫	樗村沈鎔緒論―初期江華學派における霞谷學受容―	『朝鮮儒林文化の形成と展開に関する総合的研究』（科學研究費研究成果報告書）
子安 宣邦	近代中國と日本と孔子教―孔教國教化問題と中國認識	環12	松村 茂樹	吳昌碩の論書―石鼓文	中國近現代文化研究6	中 純夫	樗村沈鎔緒論―初期江華學派における霞谷學受容―	『朝鮮儒林文化の形成と展開に関する総合的研究』（科學研究費研究成果報告書）
崔 淑芬	袁世凱と中國近代化教育	筑紫女學園大學論叢14	丸山 宏	臺南道教の奏職文檢	東方學の新視點	中 純夫	樗村沈鎔緒論―初期江華學派における霞谷學受容―	『朝鮮儒林文化の形成と展開に関する総合的研究』（科學研究費研究成果報告書）
澤 博勝	近世社會における佛敎的「教え」の受容と傳達	佛敎史學研究46―1	森 紀子	民國初期孔運動の初歩的考察	神戸大學文學部紀要30	中 純夫	樗村沈鎔緒論―初期江華學派における霞谷學受容―	『朝鮮儒林文化の形成と展開に関する総合的研究』（科學研究費研究成果報告書）
肖 啓明	五四新青年派の「反傳統主義」の論理	東洋文化復刊91	吉田 公平	中國哲學史の誕生	神話と詩 ²	濱田 耕策	新羅の儒教受容	アジア遊學50
杉本 史子	民國期の女子教育と家庭改革	中國研究論叢 ²⁰⁰³	與小田隆一	陥落直前期の天津における海風社活動	九州中國學會報41	古田 博司	李朝時代の民衆と儒教	アジア遊學50
高柳 信夫	『政治講義』に見る嚴復の思想的特質	中國―社會と文化18						

九、琉球・朝鮮

邊 英浩	李退溪の權力論―朱子・李栗谷との比較を中心として―	東アジア研究 36	有馬 卓也	高橋赤水『赤水文鈔』翻刻・譯注(下)	徳島大學綜合科 學部紀要・言語文化10	河野 昭昌	聖徳太子と聖徳太子信仰との狹間で―東京都美術館他「聖徳太子展」より―	堯榮文庫研究紀要4
本田 洋	地域社會と儒教	アジア遊學 50	有馬 卓也	岡本韋庵『救語演說』翻刻・譯注	徳島大學國語國文學16	近藤 正則	佐藤一齋の筆翰心畫說―近世儒者の書論―	岐阜女子大學紀要32
南 富鎮	本 張赫宙の朝鮮と日	アジア遊學 52	五十嵐眞司	三浦梅園の人間論―天道に順つて人と成るとは何か―	二松學舎大學人文論叢71	櫻田 芳樹	金澤の漢學	新しい漢字漢文教育37
都賢喆〔著〕 福井讓〔譯〕	高麗末における性理學の特徴	朝鮮學報186	池上 正治	徐福と青森の小泊	アジア遊學 52	笹本 直衛	八丈島の徐福傳説	アジア遊學 52
森平 雅彦	朱子學東傳の國際的背景	アジア遊學 50	池田 英雄	人間池田蘆洲と史記補注―没後七十年の追憶の記―	東洋文化復刊91	佐藤 眞人	『延暦寺護國緣起』の考察―成立事情および記家との關係を中心に―	日本思想史64
横久保義洋	金澤榮の佛教觀	岐阜聖徳學園大學佛教文化研究紀要2	伊東 倫厚	伊藤東崖の『周易』十翼批判	日本中國學會報 55	佐野 大介	中井履軒の「孝」觀―懷徳堂文庫の研究―	『懷徳堂文庫の研究』(大阪大學共同研究報告書)
吉田 光男	韓國の士族・氏族・族譜	アジア遊學 50	江口 尙純	岡井赤城『詩疑二卷』について	詩經研究 28	柴田 篤	楠本海山覺書―ある専門學者の生涯と著述―	香椎瀉49
六反田 豊	朝鮮はいかなる意味で儒教社會なのか	アジア遊學 50	大島 晃	林羅山『性理字義諺解』と松永尺五『發松倫抄』	斯文111	清水 徹	伊藤仁齋の詩論における「詩人玉屑」の影響	日本中國學會報 55
六反田 豊	朝鮮時代の儒教教育機關	アジア遊學 50	岡田 芳朗	日本最古の曆―その年代推定と曆註解釋―	月刊しにか 2003-8	清水 則夫	「理」と「太極の理」―山崎闇齋の理氣論について―	早稲田大學大學院文學研究紀要48 第1分冊
渡邊 欣雄	長壽縣沖繩の誕生	アジア遊學 53	小川 晴久	三浦梅園の「天境」の四民論と禮樂制度	二松學舎大學人文論叢71	鈴木 保實	永遠なる生命「孝」―中江藤樹孝説をめぐって―	315 道徳と教育314
赤崎 敏男	八女の徐福傳説	アジア遊學 52	奥野 利雄	新宮の徐福さん	アジア遊學 52	鈴木 保實	中江藤樹の孝信仰と良知	4 宗教研究76 335
朝倉 孝之	日本漢詩の教材化―漱石の場合―	新しい漢字漢文教育37	郭 永恩	津田左右吉における『老子』思想の研究について	宗教研究76 335	鈴木 保實	佛敎史學研究46	1 堯榮文庫研究紀要4
荒川 紘	水戸學の思想と教育	静岡大學人文論叢54-1	川添 昭二	日蓮と北條氏	佛敎史學研究46	鈴木 保實	中江藤樹の孝信仰と良知	4 宗教研究76 335
甲田 有呷	『三十六流印信集』成立考		甲田 有呷	『三十六流印信集』成立考		鈴木 保實	中江藤樹の孝信仰と良知	4 宗教研究76 335

瀨尾 邦雄
水野元朗における
荻生徂徠及び太宰
春臺の思想的受容
の一端について

下田獄における第
二の「投夷書」に
ついて―松陰の覺
悟に對するペリ
側の共感―

環 14

町泉壽郎・
小曾戸洋
〔共著〕
新出の多紀元堅門
人録について(上・
下)

漢方の臨床 50
3・4

高橋美由紀
室町時代の伊勢神
道―荒木田守晨を
中心として

富士山の傳説「ツ
ルになつた徐福」
―比較古典教育研
究ノート(3)―漢文
教學の斷絶と繼承―
江戸から明治へ―

アジア遊學 52

町泉壽郎・
小曾戸洋
〔共著〕
多紀元簡失脚の背
景―醫學館官立化
當初の事情

日本醫學史雜誌
49―2

瀧 康秀
熊澤蕃山の述作の
意識と和書・和歌

北海道教育大學
人文論究 72

アジア遊學 52

江戸後期の醫學の
場合―幕府醫學館
の學績を中心に―

日本思想史學 35

田中 悠文
報恩院檢校前權僧
正憲深廣年譜

日本でも徐福を
「歴史の人物」に

アジア遊學 52

度會常昌と夢窓疎
石との邂逅

日本思想史 64

田畑 眞美
自己反求、或いは
倫理的諸問題の
檢討―仁齋學と徂
徠學に即して―

石田梅岩と「三方
よし」の思想

廣島大學中國古
典文學プロジェクト
研究センター
年報「中國古典
文學研究」(創
刊號)

安藤昌益の地域と
時代第八章「統道
眞傳の思想」

北鹿新聞(連載
10回)

遠 志保
日本における徐福
傳説研究のこれか
ら

香川景樹と仁齋學
日本近世における
絹衣論の展開

東洋の思想と宗
教 20

林羅山と新井白石

國史學 180

杜 軼文
兒島獻吉郎の支那
文學史研究につい
て

佛敎史學研究 46

アジア遊學 52

増村朴齋の生涯と
詩業

新しい漢字漢文
教育 37

陶 徳民
明治漢學者の多元
主義的文明觀―中
村敬宇・重野安繹
の場合―

藤田正勝ほか編
『東アジアと哲
學』、ナカニシ
ヤ出版

新しい漢字漢文
敎育 36

久保木竹窓撰文
「坂部惟道墓表」
解題並びに譯注

斯文 111

陶 徳民
下田密航前後にお
ける松陰の西洋認
識―米國に残る
「投夷書」をめぐ
って―

中世神道説の神靈
觀―超越と内在へ
の視座から

日本思想史 64

那波木庵の位置―
京學派から仁齋學
派へ―

東洋の思想と宗
教 20

環 13

肥後の儒學

新熊本市史近世

日本思想史 64

日本思想史 64

東より子
富士谷御杖の神典
神釋―「欲望」の

矢羽野隆男

日本思想史 64

並河寒泉撰『難波
なかづかみ』翻刻
と解説

中國研究集刊 34

山崎 益吉	横井小楠の税思想 別冊『環』7	湯淺幸孫名譽教授 著作目録續	26	中國思想史研究	坂出 祥伸	中國古典籍文獻學 入門(二)―元明 時代より現代まで	關西大學文學論 集52―3
吉田 公平	カウンセラ―とし ての中江藤樹 大東文化大學漢 文學會誌42	九州産業大學圖書 館所藏孝經關係和 漢書目録	九州産業大學國 際文化學科紀要	25	懷德71	漢文大藏經の歴史― 特に宋元版大藏經 について	斯道文庫論集37
吉田 公平	鎌田柳泓の『中庸 首章講義筆記』に ついて 16	大阪大學藏『並河 寒泉文庫』簡介	懷德71	懷德71	柴田 篤	岡本さえ著『近世 中國の比較思想― 異文化との邂逅―』	中國哲學叢刊28・ 29
吉田 公平	林良齋と池田草庵 陽明學15	懷德堂文庫資料解 說(9)	『懷德堂文庫の 研究』(大阪大 學共同研究報告 書)	『懷德堂文庫の 研究』(大阪大 學共同研究報告 書)	鈴木 健郎	池澤優著『孝思想 の宗教學的研究― 古代中國における 祖先崇拜の思想的 發展―』	中國出土資料研 究7
吉田 公平	井上圓了の破邪論 二則―鶴飼徹定と 芥川龍之介― 井上圓了センター 年報12	懷德堂文庫等所藏 新收資料・器物等 目録	『懷德堂文庫の 研究』(大阪大 學共同研究報告 書)	『懷德堂文庫の 研究』(大阪大 學共同研究報告 書)	住吉朋彦 (ほか)	『韻府群玉』版本 考三	斯道文庫論集37
米田 弘仁	空海と『釋摩訶衍 論』 山崎蘭齋の『神代』 認識に關する一考 察―朝鮮の儒者安 鼎福の上古認識と の比較を通じて― 立命館史學24	明治初期、官公廳 印刷部門の動向 傳	日本出版史料8	日本出版史料8	高橋 智	安井家の藏書につ いて―安井文庫研 究之二	斯道文庫論集37
李 豪潤	劉 萍	薄井 俊二	『天臺山記』の流 傳	55	日本中國學會報	根本通明先生藏書 紀略―根本文庫研 究之一	斯道文庫論集38
劉 萍	儒學文學觀的破滅 ―青木正兒的儒學 學中國文學教室 紀要7	再び國立國會圖書 館藏『天臺山記』 について	汲古44	汲古44	高橋 智	『懷德堂紀年』と その成立過程	中國研究集刊32
十一、書誌學							
會谷 佳光	『秘書省續編到四 庫闕書』の成書と 改定 東方學106	神塚淑子・ 寺西光輝・ 梁音〔共著〕 道教關係著書論成 目録(2002年)〔平 14〕	東方宗教102	東方宗教102	張 小蘭	王克文著『王精衛・ 國民黨・南京政權』	東洋學報85―3
有馬 卓也	石川英昭著『中國 古代禮法思想の研 究』 29	雲南省社會科學院 東巴文化研究所編 譯『納西東巴古籍 譯注全集』全100卷	東洋學報85―3	東洋學報85―3	寺門日出男	懷德堂文庫藏『萬 年先生遺稿』をめぐ って	中國研究集刊32
池田 秀三	小島祐馬著『中國 思想史』『古代中 國研究』 新しい漢字漢文 教育37	嶮峨本『史記』の 書誌的考察	法政大學文學部 紀要49	法政大學文學部 紀要49	アレアナ フロリン	新發見の安世高譯 『安般守意經』金 剛寺本について	東方學の新視點

學界展望(哲學)(二〇〇三年一月〜十二月)

中見 立夫
清朝内閣大庫明清
檔案の流轉と臺灣
・中央研究院歷史
語言研究所に所藏
される滿洲語檔案

東方學 106

西口 智也
詩經關係文獻目錄
〔邦文篇〕1991-1999

詩經研究 28

野間 文史
讀五經正義札記
(七)―宋慶元刊
『春秋正義』管見

15 東洋古典學研究

橋本 健午
『戦線文庫』につ
いて

日本出版史料 8

長谷川潤治
少年詩人・井上圓
了―新資料・稿本
『詩冊』を讀む―

斯文 111

福井 文雅
インド・中國間の
「譯人」の實態

東方學の新視點

翠川 信人
中國古代哲學・歷
史文獻中における
『詩經』各篇別の
引用狀況一覽(2)
―小雅―

東方研究 2

大和 博幸
伊勢山田の地方書
肆講堂(藤原家・
加藤家)文書の解
題と翻刻―近世
の部

日本出版史料 8

十二、その他

阿部 泰記
湖南・江西にお
ける包公祭祀

東アジア研究 2

池田 秀三
弔湯淺幸孫先生文
麥谷邦夫編『中國
中世社會と宗教』

26 中國思想史研究

石井 昌子

哲人往矣、存者奈
何―松浦友久先生
を懷う―

東方宗教 102

植木 久行

雲南關索戲とその
周邊

金澤大學中國語
學中國文學教室
紀要 6

上田 望

漢唐河川海湖誌輯
逸(稿)

1 埼玉大學教育學
部紀要(人文社
會科學篇) 52

薄井 俊二

川原秀城著『毒
藥は口に苦し』

東方宗教 101

浦山 きか

九州大學藏「島田
家資料」目錄考
(二)―雜・藍泉
追悼詩文の部―

29 中國哲學叢刊 28・
中國哲學叢刊 28・

大庭 卓也

張明輝著『先秦禮
思想之研究』

二松學舍大學人
文論叢 71

小川 晴之

Louis Konjathy
編『Title Index to
Daoist Collections』

東方宗教 102

垣内 智之

漢文訓讀の讀みに
ついて

新しい漢字漢文
教育 37

菊地 隆雄

大淵君を憶う

東方宗教 102

窪 徳忠

孫昌武著『道教
與唐代文學』

東方宗教 101

戸崎 哲彦

周紹良・趙超主編
『唐代墓誌彙編續
集』

東方宗教 102

齋藤 勝

蘇精著『馬禮遜與
中文印刷出版』

東方宗教 102

坂出 祥伸
宮澤正順著『曾榘
の書誌的研究』

東方宗教 102

朱 海濱
近世浙東周雄信仰
の發生と變容

東方學 106

周桂鈿〔著〕
趙立男〔譯〕
千山遮り住めず、
畢竟東流し去る―
中國大陸における
儒學研究の現狀に
ついて―

名古屋大學中國
哲學論集 2

田中 文雄
道教の『十王經』
とその儀禮

東方學の新視點

永井 晉
陰陽道の裾野を廣
げるふたつの出版
物

東方宗教 102

奈良 行博
シャヴァンヌ著、
菊地草論譯『泰山―
中國人の信仰―』

東方宗教 101

二階堂善弘
『八仙東遊記』に
おける「過海」故
事の變容

東方學の新視點

花田 尊文
『中國書道辭典』
の正誤考異(その
II)

文林 37

福井 文雅
回想記 ミンネル・
スワミエ教授

東方宗教 102

本野 英一
アジア的税思想と
は何か―中國の事
例から

別冊『環』 7

益滿 義裕
俑から見た中國古
代のウマの變容

學習院史學 41

松田 智弘
新川登龜男著『道
教をめぐる攻防』

東方宗教 102

宮坂彌代生

東方宗教 102

明神 洋 山水の神韻と佛教 東方學の新視點
 村上 嘉實 楠山春樹著『老子の
 人と思想』 東方宗教102
 孟 二冬 『登科記考』と『登科記者補正』について 中國—社會と文化18
 矢嶋美都子 中國語の諺に見る中國人の動物觀 亞細亞大學學術文化紀要3

十三、補遺

辛 賢 京房「八宮積算法」試論 筑波中國文化論叢22
 辛 賢 邵雍と宋代易學—「易經」分經問題を中心— 富士ゼロックス研究助成論文

學界展望（哲學）

はじめに

平成十五年の一年間に、中國哲學關係論著として六百點以上をかぞえることができた。この中には、會員以外のものも多く、「哲學」部門と言いながら、儒道二教や諸子百家といった傳統の中國思想・哲學に關する論著だけではなく、中國の歴史學・考古學・經濟學・神話學・文化人類學などいわゆる中國文化の多様な内容に及んでいる。その點では、語學・文學よりも幅廣く、學際化が進んでいると言えるかもしれない。幅廣いというより、あまりにも雑多のご批判を受けるかもしれない。ただし、この十年以上の大學改革で、明治以來の「文・史・哲」の三分類が崩れ、とりわけ戦後の支那哲學から中國哲學への改名が、さらに中國思想文化といった名稱へ、看板換えをしてきた當然の結果なのかとも思われる。最初にお断りしておかなければならないのは、筆者には、ここに挙げたすべてに目を通すことなど、とても出来なかったことである（それが要請されているわけではないが）。以下の拙文は、偶然目にとまったり、あるいは自分の興味にまかせて読んでみたものを、それらしく羅列しているに近いともいえるのだ。

また、本稿は、あくまでも「展望」であって「評價」ではないことである。學問的な業績評價については、近年の各大學や研究機關が「自己點檢自己評

價」や「外部評價（ピアレビュー）」といった評價行為を実施することが、ある種の年中行事になっていて、その評價の客觀性を擔保するために、すでに然るべき評價を受けているという證據文獻の提示が求められている。本稿には、こうした狀況に似合う評價が要請されているかもしれないが、それならばそれに相應しい「目利き人」が本稿の作成にあたる必要がある。今後はそうした方向での人選が必要かもしれないが、少なくとも今回の寸評には、その任は重すぎる。以下の拙文は、したがって、昨年一年間の哲學關係論著を並べてみて、管見に入った學界の大まかな動きを、自己流にまとめて報告するものであることを、まずお断りしておきたい。

一、研究雜誌の動向

本會の會員の多くが、大學・大學院を中心とした高等教育機關に所屬して研究に従事している。とりわけ大學・大學院の關係研究室は、斯學の研究と教育の推進において中心的役割を果たして、その成果が、研究室が母體となった研究團體名で刊行される學術雜誌に公表されているのは周知のことだろう。

例えば、平成十五年には、東京大學中國哲學研究會が『中國哲學研究』第一八號を、早稻田大學東洋哲學會が『東洋の思想と宗教』第二〇號を、京都大學中國哲學史研究會が『中國思想史研究』第二六號を、九州大學中國哲學研究會が『中國哲學論集』第

二八・二九合併號を刊行している、などなどである。それらは、ともに研究室の歴史と傳統を背景に、斯學研究に關しての一定の方向性や傾向を示しているように思われる。

その中で、目立ったのは、大阪大學中國學會の機關紙『中國研究集刊』が、この一年で第三二號・別冊第三三號・第三四號の三冊を刊行し、斯學研究の西の牽引役をはたしているばかりか、そうした同會の活動にたいして「蘆北賞」が授與されたことである。

「蘆北」は、故 橋本循氏（立命館大學名譽教授）の雅號である。「蘆北賞」は、氏の遺徳を偲び平成元年に設立された財團法人橋本循記念會が、中國學に關する優れた研究論著や學術誌に對して表彰をしていて、平成十五年は、大阪大學大學院中國哲學研究室の編纂する『中國研究集刊』にたいして、第十三回の同賞が授與されたものである（詳しい經過は、同誌第三四號の湯淺邦弘「千字文」周行の道——『中國研究集刊』の「蘆北賞」受賞について——」参照）。

同誌が創刊されたのは、ちょうど二十年前の昭和五十九年（一九八四）で、創刊に盡力された加地伸行氏のユニークな編集方針で、長短よりも内容を重視し、論文に準じた報告類も積極的に掲載し、研究室外にも開かれた雑誌として、今日の確たる位置を確立し、受賞にいたったものである。例えば、ここに連載されている岩本憲司氏の一連の『春秋經傳集解』譯稿は、既に最初の部分が單行本化（汲古書院、

二〇〇一年刊）している通り、學界に貴重な貢獻をしている。また、同研究室は、現在、湯淺邦弘氏を中心に、インターネットでの研究公開にも積極的であり、中國哲學研究（とりわけ次に述べる戰國楚簡研究の、我が國における中心據點のひとつである）と併行して大阪の懷徳堂の研究も擔っていて、最も活發な研究推進母體をなしている。

なお、同様な學術誌の受賞は、前年の平成十四年にもあった。それは、上智大學國文學研究室の大島晃氏を中心にした漢文學研究會が刊行している『漢文學 解釋與研究』に對して、漢字文化振興會より「漢字文化獎勵賞」が授與されたことである。大島氏の試みは、既成の和漢比較文學會などの和文學から漢文學へのアプローチに對して、中國學からの漢文學へのかかわりを模索して、その成果を平成十年に學術雜誌『漢文學 解釋與研究』第一輯にまとめて刊行して以來、毎年一冊、巻を重ねて平成十四年に同誌第五輯にいたり、漢字文化振興會より「漢字文化獎勵賞」が授與されたものである（詳しくは、同誌第五輯「編集後記」参照）。この雑誌には、江戸期の儒學の文獻調査や思想研究だけでなく、「先學の風景——人と墓」と題された江戸の儒者の傳記とその菩提寺や墓地を確認して歩くユニークなルポルタージュが連載されており、現在の漢學の位置を實感できて興味盡きない。平成十五年十二月には、同誌第六輯を刊行し、元氣な活動振りを示している。以上の二誌は、たまたま受賞した縁で取り上げたが、他に北海道大學中國文化論研究室的伊東倫厚氏

が中心になって日本周易學會を組織し、『易學研究資料叢刊I 張南軒の太極說』や北京大學の朱伯崑著『易學哲學史』（既刊は第一編先秦時代・第二編漢唐時代）の翻譯刊行を繼續中であり、いずれ大きな實をむすぶことと思われる。

また、廣島大學東洋古典學研究會の機關紙『東洋古典學研究』は、大阪大學の『中國研究集刊』同様、年二回の刊行で、内容も論文や譯稿の連載が半分以上を占めるといふユニークな編集方針をとっていて、平成十五年には第十五集・第十六集の二冊を刊行している。編集擔當の野間文史氏のご苦勞が偲ばれる。以上の他にも、多くの研究室や學術誌が、人材や經濟條件などの厳しい制約があるにもかかわらず、研究推進の母體として健闘しているのは喜ばしい。

二、單行本の動向

單行本の著作には、最新の研究成果の報告書（目錄では「科學研究費研究成果報告書」等の表記に統一してある）や、書き下ろしの啓蒙書があるが、その他に、時間をかけて書き續けてきた研究成果・論文の一定量を、改めて著書としてとり纏めたもの、例えば博士學位請求論文の公刊書などが、その學術性の高さから注目に値しよう。

そうした意味では、博士論文ではないが數年にわたる共同研究の成果を一書に纏めた、池田知久氏の編著『郭店楚簡儒教研究』（汲古書院）は、筆頭に上げたい研究書である。同氏や李承律氏、近藤浩之

氏らの東京大學郭店楚漢研究會の、その共同研究の成果を、それまで同會編の研究雜誌『郭店楚簡の思想的的研究』第一卷（一九九九）より第五卷（二〇〇一）までの五冊にわたって公表してきたものの中から「儒家思想に關する一定の水準に達した譯注や論文などを集めて、一冊の單行本」にしたもので（同書「序文」より）、ここには池田氏が別に組織した大東文化大學郭店楚簡研究班の編刊した研究雜誌『郭店楚簡の研究』第一卷（一九九九）から同第三卷（二〇〇一）までのものからも採られている。そうだが、内容の充實ぶりは、衆目の一致するところだろう。池田氏には、先に『郭店楚簡老子研究』（東京大學中國思想文化學研究室、一九九九）も刊行されており、今日、この方面では最も力のこもった活動を展開中のひとりといえる。

郭店楚簡は、周知の通り、一九九三年に發見され、それが整理されて『郭店楚墓竹簡』（荊州市博物館編、文物出版社）として公刊されたのは一九九八年のこと。まだ五年餘りしか、経過していない。同種の楚簡として、これとは別に上海博物館が入手したものが、整理されて『上海博物館藏戰國楚竹書』（既刊二〇〇一年の第一分冊、二〇〇二年の第二分冊）として公表されつつあり、その全貌がまだ不明であるばかりか、池田氏が言う如く、世界で陸續と發表されている論著は、百人百様で、歴史的位置付けも思想的的位置付けも曖昧なままに議論が進んでいて、定説に程遠い状況であるらしい。

こうした中で、議論の整理のための基礎資料とし

學界展望（哲學）（二〇〇三年一月〜十二月）

て、二點の勞作を紹介しておきたい。そのひとつは、この『郭店楚簡儒教研究』所收の池田知久・李承律編「郭店楚墓竹簡關係論著目錄」で、一九九四年より二〇〇〇年二月三十一日までの「論文集、目錄、著書、論文、雜誌、新聞記事、會報、學會發表を集め」たもので、論文だけでも中日韓に歐米をあわせ46點を擧げている。もう一點は、先の大阪大學中國學會の機關紙『中國研究集刊』別冊第三號の特集「戰國楚簡研究の現在」で、郭店楚墓竹簡關係全12篇と上海博物館藏戰國楚竹書既刊9篇について、それぞれの記事について（1）書誌情報、（2）内容と研究概況、（3）主要釋文・註釋・研究にわけて、基礎情報と研究狀況とその問題點を簡潔にまとめている。これらの執筆者は、「戰國楚簡研究會」の淺野裕一氏、湯淺邦弘氏、福田哲之氏、竹田健二氏、菅本大二氏らが分擔している。研究論文とはジャンルを異にするが、楚簡をめぐる現況理解のためには、時宜にあった好企畫であろう。

平成十五年に刊行された單行本のうち、論文博士としての學位請求論文が改めて著書として公刊されたものが何冊かある。その中で、石川英昭氏の『中國古代法禮思想の研究』（創文社）や三浦秀一氏『中國心學の稜線 元朝の知識人と儒佛道三教』（研文出版）などは、二十年三十年という時間をかけて考察を重ねてきた貴重な研究成果の公刊書として、注目に値しよう。

前者の石川英昭氏は、東北大學法學部の出身で、専門の法哲學の分野で活躍される一方、中國の先秦

より漢代にいたる法思想の研究家としても夙に名を知られていた。本書は、歐米の近現代的法理論との對比や法哲學による問いかけなどにより、既成の中國學者にはない独自の視點からの中國古代法思想史になっている。ただ、近年出土の法制資料や楚簡は視界にはいついていなくて、今後の補充が待たれるように思われた（同書の書評は、すでに有馬卓也氏が『中國哲學論集』二八・二九合併號にて詳細に論じておられるので参照されたい）。また、同書の「あとがき」で、氏が歐米の法概念との微妙なズレを常に意識させられたといい、さらには「中國思想研究では、中國的概念はいわば中國的「了解共同體」を前提しなければなかなか理解できないことを、常に意識させられる」（同書、三〇五頁）と指摘されているのは、中西にまたがる長年の研究經驗を通しての發言だけに、傾聴に値するように思われる。中國的「了解共同體」を前提にした議論は、法概念だけではなく、他の中國思想哲學用語を用いた議論にも言えるものはなからうか。今後、研究の國際化を前にして、ますますこの中國的「了解共同體」を意識化して、對處せざるをえないのではなからうか。

後者の三浦秀一氏も、現在東北大學教授で、その著『中國心學の稜線 元朝の知識人と儒佛道三教』も、もとは氏の學位請求論文である。本書は、宋學（朱子學—理學）から明學（陽明學—心學）といった大きな時代の思想山脈のその「稜線」を辿るものとして、中間の元王朝とその前後の學者やその學術思想、例えば許衡、吳澄、宋濂らの思想、道學や全

眞教の道教思想を對象に考察し、元において金王朝の思潮が南宋の朱子學と融合したことや、元末民初の心學運動が佛敎道教の心の内面化によつていたことなど、貴重な見解を提供している。全五百頁の大冊で、門外漢には、どの議論も新鮮に感じたが、なかでも附論「元朝南人における科擧と朱子學」は、元王朝下で朱子學が科擧に取り込まれる背景を丁寧に論述して興味深く感じた。

平成十五年に公刊された著作で、もう一點挙げた。それは、幼學の會編『孝子傳注解』（汲古書院）である。周知のとおり、劉向『孝子傳』以來、中國で數多く作られた孝子傳は、本國ではつとに散逸してしまひ、日本にその古抄本が二本（陽明文庫藏「陽明本」と京都大學付屬圖書館清家文庫藏「船橋家本」）傳わっている。その二本をもとに、これを黒田彰氏をはじめとする幼學の會が丁寧に訓讀し注解を施したもので、鮮明な原本の影印寫眞版と豊富な關係圖象資料及び黒田氏の解題をもあわせ掲載している。中國に源を持つ孝行思想が、アジア世界に廣がった事實の一端が窺えるもので、こうした地道な勞作が、やがて本國にも紹介され斯學の發展に寄與するであろうことは、間違いない。

三、研究論文の動向

最先端の研究成果が、學會誌や紀要に掲載される論文であるが、その動向としては、まず本數の多さが挙げられよう。學術雜誌や紀要だけでなく、出版

社や書店の宣傳を兼ねた書評誌に、近年では市販の半學術的な啓蒙雜誌も増えた。つまり、發表する媒體が飛躍的に増えている。従つて、全體の本數も多いが、個人の執筆する論文數も多くなつてゐる。それも譯注の連載が多いのは、最近の傾向ではないかと思う。

新知見を備えた論文は、そう簡単に量産できるものではない。かつて大學院在籍中や半人前の研究者としてうろろろしていた頃に、何人かの先達から、「一年に一本は論文を書くように」と言われてきた。因みに、「五十歳になる前に研究書一冊は出せ」とも言われたように記憶するが、あるいは、「四十歳臺に、翻譯書一冊・研究書一冊は刊行しろ」と命じられたようにも思う。こうした時代から、はや三十年がたつ。今は、大學院後期課程三年間で、學術博士の學位論文を書き上げる爲には、一年一本では間に合わない。學位授與率の向上のためには、師生ともに昔のように悠長にしては行かないのである。ともあれ論文の多さは、斯學隆盛を象徴するパロメーターのひとつではあるだろう。

以下、時代順に氣付いたことを記していこう。先秦の論文では、斷然、郭店楚漢や上博楚簡を對象にした論考が目を引くのは、いまやそれを無視して先秦思想が語れないからにはかならない。この傾向は、まだ當分續くだろう。

漢代では、董仲舒と『春秋繁露』に關する論考・譯注が點數の多さからも目を引くが、それは、依然として解明を待たれる問題も多いからであろう。例

えば、天人相關説を基にした董仲舒の君主論は、君主權の抑制にあつたのか（重澤俊郎説）、あるいは逆に天に對する能動性・主體性を認めて君主權の強大化を狙つたのか（池田知久説）。この問題について、近藤則之氏「董仲舒における天と君主——君主主體性論の再吟味——」（『中國哲學論集』二八・二九合併號）では、君主には「能動性は認めても、主體性まではみとめられない」が、聖人には禮樂を通じて天への主體性を認めていたとの、二分論を導き出している。また、董仲舒の「儒敎國教化」を要請した對策については、それが「祿利之路」に繋がつたという點では決定的な意味をもつたと思われるが、上述の近藤氏の論文も、次に述べる渡邊義浩氏も、國家の儒敎化は後漢からで、前漢末以來の儒者が董仲舒を持ち上げた虚像であるとする福井重雅氏の所論を肯定して立論しているのが、興味を引いた。

漢魏にわたる研究論文で印象深かつたのは、渡邊義浩氏の一連の論考である。先に一人で數本の論文を物している狀況に觸れたが、氏はこの一年間に以下の四本の論文、すなわち「三國時代における「公」と「私」」（『日本中國學會報』五五）、「所有と文化——中國貴族制研究への一視角——」（『中國——社會と文化』一八）、「死して後已む——諸葛亮の漢代的精神」（『大東文化大學漢學會報』四二）、「史の自立——魏晉期における別傳の盛行を中心として」

（『史學雜誌』一〇二—一〇四）を發表された。ともに意欲作であり、學界に一石を投じる創見に富んだものである。氏は、別に『全譯後漢書』の編著者も務

められている。この平成十五年内に出た論文では、おもに六朝貴族文化の内實を問題にされ、谷川道雄氏の所論によりつつも、貴族制を土地所有者として規定するのではなく、文化所有者と見られることにその存立基盤があったと明快に論断された（「所有と文化——中國貴族制研究への一視角——」参照）。その文化の内實は、儒佛道三學（あるいはそれに「女學」を加えた四學）の他に、史學の私有化という指摘も、大變新鮮であった。

なお、氏とは全く別の観点から、唐代の史學思想を論じた福島正氏の論文『「論衡」と「史通」』（『中國思想史研究』二六）は、亡き師・湯淺幸孫氏より「十年近く前」に受けた二示唆から、後漢の王充と唐の劉知幾との歴史考證法について、その差異と類似点を、『三國志』注の裴松之の方法を比較介在させて詳細に考證している。結論は、是非、本論文について見られたい。年季の入った、しかも情理兼備の説得力にとむ論考になっていて、脱帽した。

宋明の論文では、やはり朱子學關係の論考や譯注が目立つが、中でも木下鐵矢氏の活躍が素晴らしい。連載中の「朱子學の位置（10）」「同（11）」（『東洋古典學研究』一五・一六）は、枝葉に分け入って逸脱氣味だが、そのスケールの大きさと論の緻密さは學界随一ではないか、と常々感服している。書評ではあるが、氏の「土田健次郎氏『道學の形成』第四章「程頤の思想と道學の登場」を讀む——「理」——理解をめぐる——」（『東洋古典學研究』一六）は、氏の論理的緻密さが如何なく發揮されており、新

な道學論争を呼びそうな氣配がする。また、陽明學についても、上田弘毅氏「王陽明の心即理について——島田虔次氏の心即理理解の再檢討——」（『集刊東洋學』九〇）や孫路易「王陽明の「良知」の再檢討」（『中國思想史研究』二六）が、注目されるが、ともに斯學に議論を呼びそうだ。この他にも、多くの地道な論考が出されているが、省略する。

四、近百年の展望

今年（二〇〇四）は、清末の外交官で、明治初期に日本に來て、本格的に日本文化を研究して『日本國志』（四十卷）を残した黃遵憲（一八四八—一九〇五）の死後百年目になる。この百年間は、日中關係が前例のない不幸な出來事にみまわれて現在もその影響下に未解決の問題を抱えているのは、周知の事實である。その原因の一端が、相互理解の不足にあったことは間違いない。もともと民族や宗教を異にする集團間の理解が、容易でないのは言うまでもないが、近代以降では、マスメディアの發達で意圖的に近親感を煽ったり、憎惡を驅り立てたりする政治的プロパガンダにも大きく左右される。それにしても、昨年（二〇〇三）、中國では馬立誠氏らの「日中新思考」論文が話題を呼んでいた（詳しくは、馬立誠著杉山祐之譯『「反日」からの脱却』、中央公論新社）。これも理解というより政治的計算が優先した判断、イデオロギー的思考の所産と言えるかもしれない。残念なことに、馬氏らの提言は、中國政

界に影響を與えるどころか、袋叩きにあったよしである。

眞の理解は、近くなればなるほど難しい。二十一世紀には、日本中國兩國がお互いの本音をぶつけ合えばあうほど、「ハリネズミの抱擁」と喩えられるがごとくトゲの痛みを感じないわけにいかないのだ。こうした日中の關係改善・相互理解に、中國學が果たす役目は大きい。少なくとも、學者以外の世間からは、大きな期待が寄せられていると見てよい。

おりしも、四天王寺國際佛敎大學と中國浙江大學日本文化研究所との協力で成立した「日中交流史研究會」が、上記の明治初期に日本に來た黃遵憲の本格的な日本研究書『日本國志』（四十卷）を取り上げて共同研究を開始し、平成十五年には、その成果が『日本國志』研究』として纏められたのは、慶賀すべきであろう。同書は、譯注編と論考編とにわかれる。前者は、『日本國志』卷三十七禮俗志「神道」の項の詳細な譯注で、日本神代史につき、神道關係の古書を精査して黃遵憲の依據した資料を明記している。後者では、矢羽野隆男氏「黃遵憲の民族觀と神道觀と」が、その思想を考察して參考になる。

黃遵憲は、康有爲ら變法派知識人に大きな影響を與えたが、彼の死んだ年に革命派の雜誌『民報』が創刊される。その主筆に迎えられたのが、章炳麟であるが、この章の革命思想形成を跡付ける資料が、彼の名著『廬書』である。これには、一九〇〇年初版本と一九〇四年重訂本があり、ともに難解で知られるが、徐復氏の勞作『廬書詳注』（上海古籍出版

社、二〇〇〇）が出てようやく讀めるようになった。更にこの『暈書』内容の理解に資する論考が小林武氏「章炳麟『暈書』と明治思潮——西洋近代思想との關連で——」（『日本中國學會報』五五）である。小林氏は、徐氏『暈書詳注』にない、章炳麟が依據した明治期の日本語譯洋書の引用を精査して、章の革命論の「屈折した意識」を抉り出している。ベテランらしい安定した筆致と内容の廣がり、革命論形成の背景を再現している。

近現代の論文では、清末にイギリスに留學して西歐の思想、特に進化論の移入者として有名な嚴復について、高柳信夫氏『政治講義』に見る嚴復の思想的特質、緒形康氏「嚴復と籌安會問題」（ともに『中國——社會と文化』一八）がその再考を迫って出色である。特に緒形論文は、嚴復の思想評價の根幹に關わる一九一五年の「籌安會」參加問題について、新出資料である嚴復の梁啓超宛の書簡（それには、梁に對して袁世凱帝政を批判するよう期待する旨が述べられている）の解讀をもとに、その背景を探り、文字通り「再考」をせまるもので、十分にエキサイティングであり、深く考えさせられた。

籌安會は、周知の通り、民國四年（一九一五）に中華民國大總統だった袁世凱の皇帝擁立を企て推進する團體と思われてきたが、氏は「籌安會と帝政運動は別範疇」だったとし、これまで、嚴復は、その運動推進者だった楊度に名義を貸しただけで、皇帝制推進は本意ではなかったというのが、通説だったが、緒形氏によれば「新書簡が帝制運動に關連した

嚴復の身の潔白を證明したことは確かでも、籌安會問題に關しては證據を缺く」とされる。と言うのも、籌安會は政體の研究團體であり、その參加には、嚴復の賭博癖を熟知していた楊度が博打がらみの投資話にかこつけて、まんまと彼を乗せてしまったという裏事情を、諸傳承資料をもとに見事に浮かび上がらせているからだ。緒形氏は、民國官僚の腐敗した私生活を抉り出すその返す刀で、北京大學の派閥から弾き出され、彼の資料が私學關係者に傳承されざるを得なかった事實をも紹介している。短い論文ながら、歴史の裏側を見事に描いていて、感服した。

最後に長堀祐造氏「レーニン」黨の組織と黨の文學（出版物）翻譯問題と毛澤東の「文藝講話」について（『東方學』一〇六）に觸れたい。これは、もともと文學部門の論文かもしれないが、「文學」という、たった一語の誤譯と誤解により、二〇世紀中國の文學界・思想界に大變な悲劇を招いた事情とその修正にいたる要因を實證したものである。

毛澤東文藝思想が、文學を共產黨の「齒車とねじくぎ」にするという黨派屬性をとることになったのは、レーニンが一九〇五年に書いた一編の論文、「黨の組織と黨の文學」に依っていた。だが、原文テキストの「文學」は、もともとは「出版物」と言った意味であり、文學一般を指してはいなかった。それなのに、毛澤東が延安での「文藝講話」に引用し、それが解放後の文藝政策にされると、もはや修正はきかず、文革後の一九八二年にやっと改譯されるにいたるが、長堀氏は、改譯には王凡西という老トロ

ツキストの一文がもともなつたとして、彼の著書がかつての毛澤東の祕書・胡喬木に渡る經緯を考證し、また、毛澤東が延安でレーニン論文を「文藝講話」に引用した狙いは、黨内の魯迅の流れを引く文學者たちの批判精神を封じ込めんとしたかったからだ、という王凡西の説を引いて結論としている。毛澤東思想が、その功罪も含め、歴史的に實證的に解剖されていて、面白く讀んだ。なお、長堀氏は、先の緒形康氏や三好伸清氏と共譯で『初期中國共產黨群像——トロツキスト鄭超麟回憶錄』（平凡社東洋文庫）を刊行している。

五、その他

この年も何人かの學界の指導者と仰がれてきた大家が鬼籍に入られた。道教研究の先驅者・大淵忍爾氏については、窪徳忠氏が心のこもった追悼文「大淵君を憶う」（『東方宗教』一〇二）を書いておられる。また、京都大學教授として中國哲學倫理學に深い造詣を有されていた湯淺幸孫氏については、池田秀三氏の一文（葬儀ののりの「弔文」、『中國思想史研究』二六）が印象に残った。掲載誌の「編集後記」によれば、追悼號として、あえて特別編集とせずに、葬儀の折の弔文となき湯淺氏の「著作目錄續編」を掲載したにとどめたと言う。見識であろう。

ところで、一九一一年の辛亥革命により清王朝が滅亡してはや百年近い歳月が流れたことになるが、古來、中國では新しい王朝が、前王朝の歴史書を書

き置くしきたりがあった。清史については、民國時代に清史館が置かれ『清史稿』が準備されたが、それは正史と認められたものではなかった。この年(二〇〇三)一月に、「清史編纂工作座談會」が開催され、中華人民共和國が二十一世紀の國家的プロジェクトとして、「國家清史編纂委員會」を立ち上げ、「清史」編纂の本格的な準備に取りかかった、よし

である。これは、中華民國(臺灣)の學界との共同作業ともなり、今後、より多くの清代を巡る歴史・思想・文學などの研討會が開催され、關係書も刊行されるらしい。筆者は、こうした情報を、平成十五年四月から一年間、東京大學大学院總合文化研究科に客員教授として來任された孔祥吉氏により示教された。孔氏は、日本では、北大、名大、阪大、廣島大などでも講演され、清末の未刊資料をもとに從來の歴史像に大膽な修正を試みられ、また日本國內でも明治人の日記や外交文書を博搜して、次々に新知見を打出された。いずれそれらは、孔氏の招聘に盡力された村田雄二郎氏との共同著作として公刊されることである。

前々年の本欄や文學部門のそれに、外國人研究者の任用問題が取り上げられていたが、會員名簿には日本人以外の名前も多くなり、近年急激に大學の中國關係科目の教員にネイティブの採用が増えたことが判明する。ネイティブ以外にも東大の李承律氏や阪大の辛賢氏などの就任は、これからの大學を背負う人材がどこに求められるかを象徴しよう。

ここ數年の印象では、大學教員の公募にも中國語

と中國社會文化の兩方をこなせる人材が求められるようになった。この條件に合うのは、中國からの留學生で、多くの大學に殺到していると聞く。大學教員の公募は殆んどの大學で實施されるようになったが、いわゆる「中國哲學」を專攻する人材の募集は、文字通り「絶無僅有」状態である。

平成十六年四月の、國立大學の法人化によって生じる大きな變化のひとつは、十年前の大學大綱化でかつての小講座制が消え、その定員枠が取り拂われて、いよいよ人員の流動化が始まることである。その方向は、社會の要請に應じた研究教育人員の確保である。したがって、社會的要請の少ない研究教育部門は淘汰されるシステムになっている。中國學の哲學部門が、淘汰されることになったと言うことではない。そうなる可能性もあり、その可能性が極めて高いのであるが、そうならない工夫が必要になった、ということである。

中國學の哲學部門の研究教育が、この日本社會に必要性である所以をわれわれ自身がしっかり考え、自覺的に行動していく必要があると感じる。さもないければ、この目録も反古紙を増やす以上の役目をしていないことになるのではなからうか。展望と言いなから、足元を見回しただけでおわるが、寛恕を請うて筆を置きたい。

(竹内弘行)